

[第8回日本語文化学会発表要旨]

初級日本語学習者におけるかな文字習得の縦断的研究

島田徳子・山下みゆき

(1994.6.4 発表)

I. はじめに

縦断的第二言語習得研究(共同研究Larp2)の一貫として、初級日本語学習者のかな表記の習得過程を調査・分析することにより、日本語の音韻体系と仮名をどのように対応させながら認識し習得していくのかを明らかにしたいと考えた。

II. 学習者の背景

学習者は1993年8月にAET(Assistant English Teacher)として来日し、1993年度のお茶の水女子大学言語文化夏期実習に初級の学習者として参加した10名である。(男性5名、女性5名/平均年齢24才/母語:全員英語)

III. 現在までの経緯

学習者は1993年8月13日に日本語の学習を開始した。平仮名清音+んは、8日間の夏期実習の初日に連想法で導入、濁音/半濁音についてはその翌日、片仮名は6日目に導入した。その後9月からは継続授業を週2時間の割合で行っている。

IV. 調査方法

1. 平仮名

読みテストについては5回、書きテストについては4回実施した。読みテストの最初の2回は平仮名の読みをローマ字で記入させ、3回目以降は国立国語研究所が「幼児の読み書き能力」を調査した際の調査シートを使用し、平仮名を音読させテープ録音したものである。書きテストについてはローマ字を平仮名に変換させるものである。

2. 片仮名

片仮名(清音+ん、濁/半濁音、拗音)合計104文字の書きテストを4回実施した。平仮名の書きテストと同様、ローマ字を片仮名に変換させるものである。

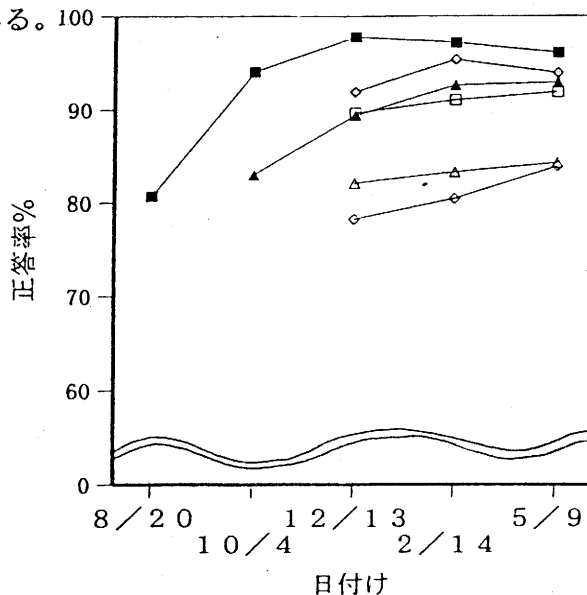
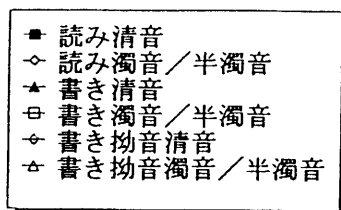
V. 結果及び考察

1. 平仮名

全体的な傾向として、次のようなことがいえる。(参照:グラフ1)
 このグラフは平仮名の正答率の平均値の推移を6つのカテゴリーごとに表したものである。まず読みについては、最初の段階から80%の高い正答率を示し、その後早い時期に95%近くまで正答率は上昇している。読み濁音/半濁音は清音に追いついていく形で推移している。但し、読みについては清音、濁音/半濁音ともに正答率が最終的に若干下降する傾向も共通して見られる。次に書き能力については、清音と濁音/半濁音において差は見られず、ほぼ同じように正答率が推移している。また読み書きを比較した場合、書き能力は読み能力に追いついていく形で推移している。最後に拗音の書き能力は正答率があまり上昇せず80%前後で停滞している。

グラフ1.

平仮名正答率推移



以上、全体的な傾向について見てきたが、文字ごと/学習者ごとに正答率のバラつきがあったためこの2つの観点から分析を試みた。

文字別誤反応の分析結果は、次の4つに分類した。(1) 全く誤反応のないもの (2) 誤用が増えているもの (3) 初回の誤反応が3以上のもの (4) 後まで誤反応の残るもの、の4つである。

* 誤反応とは誤用と無回答を合わせたものである。

学習者ごとの習得状況の推移は、習得状況の推移から習得の早いグループから A, B, C の 3 つのグループに分類した。また上位グループ A、B を特殊拍の読みと拗音の書き能力の 2 つの観点から学習者間に差が見られたため、タイプ 1～3 に分類した。この結果は他のデータ（ディクテーション等）を分析する際に参照するつもりである。

2. 片仮名

平仮名同様、文字別／学習者別に分析を行った。文字別誤反応の分析結果は次の 5 つに分類した。(1) よく平仮名と置き換えられる文字

(2) 全く誤反応がない文字 (3) 時間の経過を経て誤用が 0 になった文字やその後、誤反応が残らない文字 (4) 誤用が増えている文字 (5) 2 回目の調査の誤反応が 7 以上の文字、の 5 つである。

学習者ごとの習得状況の推移は、習得の早いグループから A, B, C の 3 つのグループに分類できた。また、グループ B は拗音の習得状況からタイプ 1～3 に分類した。

平仮名及び片仮名の分析結果を照合してみると、学習者別にみた場合 3 つのグループに属する学習者の分布はほぼ一致していた。

VI. 今後の課題

今後は今回の 1 文字ごとの習得状況のデータを参照しながら、学習者が“語”を表記する時、日本語の音韻体系をどのように認識し、それをどう書き表しているかといった観点からディクテーションの分析や学習者自身の書いた日記の分析を行いたいと考えている。

VII. 主な参考文献

- ・木村宗男(1971)「日本語教授法の基本問題－文字教育」講座日本語教育第10分冊, p. 85~92
- ・天野清(1986)『子どものかな文字の習得過程』秋山書店
- ・伊藤芳照(1991)「日本語教育における文字習得」『日本語学』3月号
- ・国立国語研究所(1972)『幼児の読み書き能力』東京書籍

L A R P 2 共同研究者：

久保田美子・佐々木由美・今井寿枝・桑原京子・桜井由美・福岡昌子
ワザ- ウイバースク・藤沢好恵・宮本百合子・遠藤聖子

(お茶の水女子大学日本語文化専攻修士2年)